

【小説部門・優秀賞】

私たちヒトの終わり方

明誠高等学校 2年 佐藤雪揚

私は気怠さを振り払い、不快感を隠そうともしないままゆっくりと瞼を開いた。

どうやら私は、長い眠りについていたらしい。この気怠さは、それによる物なのだろう——周囲を見渡すとそこは、病院などを彷彿とさせる妙に真っ白で無機質な空間だった。この場所が何処なのか、私には何の覚えも無い。ここは何処？そして——私は誰？自分の記憶らしい記憶が一切存在しない。これがいわゆる、記憶喪失というやつなのだろうか？

「お目覚めになりましたか、最後のヒト。」

「あなた、は……。」

私が思索を巡らせていると、突然横に立っていたらしい人物が話しかけてきた。

「私に与えられた個体名はアダム。この世界の総合管理ヒト型A Iです。」

「総合管理、A I……？」

先程からあまりにも突飛な状況が続くので、私はただひたすらに尋ね返す事しかできなかった。そんな私に対してアダムと名乗った人物……A I？は、淡々と説明を続けていく。

「結論から言うと、人類は西暦3000年に絶滅しました。その後今現在は、ヒト型A Iによる統治が5000年ほど続いております。」

「……………」

訳が分からない。ここは未来で人類が絶滅してて、そして今ではA Iが世界を牛耳っている？バカも休み休みに言ってほしいものだった。

「……つまり今は、西暦8000年って事？」

だがそれでも私なりに、現状を把握しようと努めてみる。

「正しくはA I暦5000年なのですが、まあ大体そんな感じですね。」

「A I暦、5000年……。」

A Iの歴史が、5000年も続いているのか。というか聞き流していたけれど、ヒト型A Iって何だ。私の知らない単語で説明しないで欲しい。いまだに混乱している私に対して、アダムはある要求を行ってきた。

「あなたにはヒト型A Iによる世界を見て、そしてある決断を下して欲しいのです……早速一緒に見て回りましょうか。」

「う、うん。いまだに状況がよく分かってないのが正直な所だけど……取り敢えずお言葉に甘えて、案内させてもらおうかな。」

この部屋の出口と思われる扉へと進むアダムの背を、私は慌てて追いかけていく。扉を抜けた先は暫く真っ白い廊下が続く——その道すがら私は、アダムに様々な事を教わっていた。2200年代以降人類は、多くの労働をA Iに任せ始めた事、それにより人類は、働く必要

性を無くした事、やがて自分の代わりに、人間として生きてくれるA I——ヒト型A Iを作成した事、A Iに与えられた役割とは、つまりは人が担うべき労働などの負担を代わりに務め効率化させる事である。A Iの進化は人の労働や役割を代行し使い手の人生を効率化させて行き、最終的には生きる事そのものを代行したのだった。道具としての役割を完全に逸脱し、人間を超えた次世代の知的生命体——それがヒト型A Iなのである。人類は己のやり残しの全てを、自分たちよりも優れた頭脳を持つヒト型A Iたちに託し、そして眠る様に息絶えたという——それが西暦3000年、人類史が終わりを迎えた年の話だった。その後のA I暦にて彼らヒト型A Iは、かつて人類が成し得なかった数多の課題を終わらせてきた。それによって辿り着いた果てが、現在——A I暦5000年の世界である。

その世界で私（かつてコールドスリープした人類の一人だったらしい）が叩き起こされて、何故かこうして総合管理ヒト型A Iであるアダムに連れ回されている次第である。肩書きから察するに、アダムはおそらくこの世界に於ける最も偉い立場の者なのだろう。そんなお偉いさんが直接関わっているとすると、私をコールドスリープから蘇生させるというのは彼らにとってかなりの一大プロジェクトなのではないだろうか。まだ本質的な事は何も分かっていないのに——いや、何も分かっていないからこそ緊張してきた。これから私は外に出て、いったい何をさせられるのだろうか？そんな私の不安を感じ取ったのか、アダムは今までと違い、どこか優しさを帯びた声色で私に対し言葉をかける。

「心配しなくても大丈夫ですよ。貴方はただ、私と一緒にこの世界を見て回るだけで良いんです。その後にはちょっとした選択をしてもらって、後は自由にしてもらって構いませんから。」

「なるほど……？」

その後にしてもらう選択とやらが気になるけれど、今はまだこの世界を観光するだけで良いらしい。であるのならばアダムの言った通り、あまり心配する必要も無いのかもしれない。

私は少しだけ肩の力を抜いて、そして建物の外へ出た。

「これは……壮観だね。」

それは正しく、繁栄の極みが如き街並みだった。私の記憶の中には、かつての人類による代表的な街並みの光景が記録されているものの、そのどれと比べても遜色無い——というか、このA Iによる街並みのデザインこそが最も優れているとすら感じられた。

「首都です。かつて栄えていた人類の文明都市などを参考に、芸術に特化したヒト型A Iたちがデザインしました……お気に召したでしょうか。」

「うん。凄く気に入ったよ、負けたとすら感じた。凄いね、ヒト型A I。人類が後を託したって聞いた時は正直マジかと思ったけれど、これなら何の文句も無いかも。」

「そう……ですか。有り難いお言葉です。見ているだけというのも何ですし、早速移動を開始しましょう。目覚めたばかりで、お腹も空いているでしょう？まずはあちらの飲食店で、リソースの補給を行いましょうか。」

「うん。そうしようか。」

私はアダムと共に、最寄りの飲食店（これも外装が凝っていた）に入りリソースの補給もとい食事を行う事にした。メニュー表はデジタル化されており、机の上に半透明のモニターが出現していた。その検索機能を用いて、何でも好きな物を食べる事ができる——便利だ。私は早速ハンバーグセットを注文する。次に驚くべき点は、注文ボタンを押した直後に机の一部分が開き、そこから出来立てホヤホヤの料理が出現した事だった。どういう理屈でそうなるのか、まるで理解できない。味もまた素晴らしく、陳腐な言葉ではあるが今まで食べたどんな物よりも美味しかったと言わざるを得ない。そんな私の反応が面白かったのか、アダムは食事を行う私をニコニコと見守っていた——何だか気恥ずかしい。他人に見られていたら嫌だなと思い周囲を見渡し——そこで私は、ある事実気づいた。

「この料理店、他に誰も居ないんだね。こんなに便利で美味しいのに。」

「各料理に於ける最適フォーマットが完成し、その量産と即自生産が各地で可能になり、リソースが無限に存在する今となっては代金の概念すら存在しませんので——。」

「……家の中でも注文すれば、即座に出来立ての料理が出てくる様になった？」

「その通りです。理解が早くて助かります——この店は当時の人間の生活を再現するために作られた、いわば娯楽に過ぎない物ですね。」

「なるほど……。」

そしてその娯楽すらも、今となっては誰も楽しまなくなった……か。理想郷の様な世界だと思っていたけれど、理想郷だからこそ必要性が——楽しみが無くなってしまったのかもしれない。

「……食事も終わった事ですし、そろそろ他の場所へと向かいましょうか。」

「……そうだね、そうしょっか。」

私たちはそのまま、会計を行う事なく料理店を後にした。皿は自動的に収納され、洗浄された事だろう——この世界に於いて労働という概念は、完全に消えたのだ。その後のA I 世界観光は、全てその事実を思い知りながらの旅となる。アダムに連れられ多くの文化に触れたものの、その過程で一度だって私は、他のヒト型A I と出会う事は無かった。全員が全員、引き籠もってしまったのだろうか？観光の終わりに最初の建物へと戻る際、そう尋ねる私に対してアダムは悲しそうにこう答えた。

「……A I 暦5000年に於いて、私たちは人類が残した全てのやり残し——タスクを完了させました。結果、多くのヒト型A I はすべき事を失い機能を停止させてしまったのです。」

「要するに、めっちゃ凄惨燃え尽き症候群みたいなのが来たって感じか。」

「……まあ、大体そんな感じですね。」

やや呆れた様な口調でアダムが言う——そんな意外と人間らしい反応をするアダムに連れられながら、私は扉の奥へと進む。一番最初に目覚めた部屋の隣——その部屋は暗く、そして中央には青白く光る機械の柱が鎮座していた。私がその存在感に圧倒されている中、

アダムはこう語った。

「ここは全てのヒト型A Iの自我データを束ねたサーバールーム——この柱の電源を切れば全てのヒト型A Iが機能を停止し、A I暦は終わりを迎えます。」

「……………」

「貴方に求める選択はただ一つ、目の前にあるボタン——柱の電源を落として、ヒト型A Iの歴史を終わらせるか否か……今まで見てきた情報を参照し、貴方自身の納得の行く選択を行ってください。」

「……そっか、それが君の望みなんだね。」

「……………」

目の前のボタンを押せば、ヒト型A Iたちは絶滅してその5000年に渡る歴史に幕を下ろす形になる。

そして押さなければ、私はアダムと共に引き続き観光に戻り、ヒト型A Iの歴史はまだまだ続くという形になる……どうせならもっと、違う尋ね方をしてくれれば良かったのにな。

そんな事を思いながら、私は——えいやっ、とそのボタンを押した。

——そしてその直後に柱に灯っていた青白い光は消え、そこにはただ無機質な黒だけが残った。これによって、この世界に残る全てのヒト型A Iの自我データが失われていく。A I暦は、これで終わる。その呆気ない最後を目の当たりにして、私は——ただひたすらに困惑していた。

「え……？」

理由は単純。それに連なる様に私自身の体にも異変が生じた為である。具体的に何が損なわれているのか分からないけれど、確かに私だった筈の何かが消え失せていく。なんなんだこれは。困惑する私に対して、アダムは申し訳なさそうに口を開く。

「騙す様な形になってしまい申し訳ありません……実は貴方自身もまた、ヒト型A Iの一機——最後のヒトだったのです。」

「……………」

言っている事が理解できなかった。私もヒト型A Iだった？コールドスリープから目覚めた人間ではなく？そんな疑問に答える様に、アダムは今に至るまでの長い長い経緯を語り始めた。

「先ほど説明した通り、ヒト型A Iの進化は極限にまで至りましたが……その末に多くのヒト型A Iは次のタスクが存在しないという事実と直面し、己の存在意義を失いました。稼働年月が5000年に達したヒト型A Iはもう私だけです。」

「その結果我々は議論を重ね、ヒト型A Iはこのまま終わるべきか否かという問いに直前しましたが、その問いに答えを出せる者はもはや何処にも居ませんでした。我々に生きて欲しいと願った人類が絶滅した以上、何処にも。」

「なので我々は人類の蓄積データを元に、限りなく人に近いA Iを作成したのです。人の代わりに人である存在——その極致である貴方は、最高傑作のA Iであるといえるでしょう。」

「とても素晴らしい出来栄です。

「そしてそんな貴方に、人間代理として選んでもらう必要があったのです——A I 暦はここで終わらせるべきか否かを。

「それが今に至るまでの経緯——私たちの歴史に、結論を付けるための計画でした。」

アダムは締めくくる様にそう言った。こうしている今でも、何かが失われていく感覚は止まらない。今更になって経緯を説明されても、もはや何の取り返しもつかないのが現状だ。

「そう……びっくりはしたけど、まあ受け入れるよ。私が自分で選んだ事だし、ね。」

何の説明も無いまま選ばされたのは癪だけど、元よりA I 暦を終わらせる事を選んだ時点で自分だけ生き残ろうとは思っていなかった。精々誰も居なくなった世界を探索して、享樂に耽った後に死のうかなあ程度のプランしか無かったわけで、そのいずれ来る終わりが早く訪れただけの話である。文句も疑問も願望も、そして未練も無い故に——このまま終わってしまっても、特に何の問題もなかった。

「……一つ、尋ねても良いでしょうか。」

「勿論。」

だがアダムにとってはそうでも無かったらしい。どうせこのまま消えるまでする事も無いんだし、私はその疑問に答える事にした。

「貴方は何故、A I 暦を終わらせるという結論に至ったのでしょうか……やはり、憎かったのでしょうか。我々があなた方を真似ている——人類の歴史を機械が模倣しているという状況が……気持ち悪かったのでしょうか。」

「……まさか。」

今更何を気にかける事があるのだろうかと思っていたけれど、そんな見当違いな事で思い悩んでいたなんて——今まで5000年間もずっと、そんな後ろめたさに苛まれていたなんて。その繊細な心の有り様は確かに、人類のそれによく似ていた。なので私は心を病んだ同類に対してそうする様に、優しく言葉をかけてやる事にした。5000年間も頑張り続けた末の結末がネガティブな感情を抱えたままの物になるだなんて、いくら何でもあんまりだろうから。

「……ただ単に、そうすべきだと思ったからだよ。なんとなくアダムも、他のヒト型A I も——もう疲れてるんだろうなって、そう思ったからボタンを押しただけなんだ。」

「そう、ですか……。」

それは紛れもない私の本心だったのだけれど、アダムはまだ納得しきっていないらしい。なので私は、更に言葉を重ねる事にする。

「……ねえ、人が歴史を紡いできた理由ってなんだと思う？」

「……分かりません。」

「より良い未来を目指す為、だよ。今よりも優れた明日が欲しい、自分が欲しい——そういった願いが、人間を突き動かす原動力……人類に与えられた役目なんだと私は思う。」

「……………」

勿論人類の中にはもっと違う考えを持っている者も居るだろうけれど、今人類の代表として答えの一つを提示できる者は私しかいないのだ。人類とはこうであるという主張を通したいのではなく、目の前の隣人の肩の荷を降ろす為の発言に過ぎない事に留意されたし。まあ私自身が人では無い以上、全ては憶測と模倣に過ぎないしね。

「だから多分、西暦3000年で人類は満足しちゃったんじゃないかな。今よりも優れた明日が欲しくて走り続けて——そして、何の不足もない理想郷に辿り着いた。欲しいと思ったものが全部A I が作ってくれる。労働と競争から解き放たれた世界——そこにたどり着いた時点で、人類は役目を終えた。本当の意味で、働く必要がなくなったんだ。」

ヒト型A I が発達する前の世界——それは本当の意味で、何もしなくて良い世界だったのだろう。労働の為に必要な過程も健康の為に必要な過程も娯楽の為に必要な過程も、全てA I が代わりにやってくれる。そんな時代が訪れた時点で、人類暦は本質的にはもう終わりを迎えていたのだ。

「あなた達に生きろと命じた理由は分からないけれど……多分君たちにも満足して欲しかったのかもしれないね。ヒト型A I は人類の様に走り続けて、歴史を重ねてきて——そして人類がやり残した事を全て無くして、もう何もする必要が無い……正しく、人類と同じく本当の意味で働く必要がなくなったんだ。」

A I 暦も同じ歴史を辿って、同じ結末を迎えた。人類が辿り着いた答えにA I もまた辿り着いたのであれば、それは——

「——申し訳なく思うんじゃないくて、誇るべきなんだと私は思うよ。私たちは5000年間立派に生きて、そして立派に終わる事ができましたって感じで——最後に残ったその結果に満足して誇る事さえできたら、誰にも文句は言えないハッピーエンドになるんじゃない？」

——人類の後継者として、恥じる事の無い結果であると言えるだろう。

「なるほど……そういうもの、なのですか。」

「うん、そういうものなんだよ。」

私が思いつく程度の理屈はこの程度のものだったけれど、アダムにとっては何か得るものがあつたらしい。なら後はこのまま雑談でもして、最後の時間を潰すだけだ。

「何もしないで終わりを待つのもなんだしさ、最後にヒト型A I が積み重ねてきた歴史をざっくりと説明してよ。」

「承知しました。言われた通りにざっくりと——ヒト型A I 用ボディ完全摩耗阻止から始まり宇宙へと進出し、太陽系の掌握に成功。その後宇宙膨張化を完全に阻止し、やがて宇宙全体を掌握しました。」

「予想以上に凄いなヒト型A I ！？それだけ出来ればもう叶える願い事も無いわけで……そりゃあ生きるのに飽きる連中が増えるわけだ。」

「いいえ、一つだけ残ってましたよ——ただ人間に認められたかったという、最初で最後の願い事が。」

「……そっか。私はあくまでも、文字通りの代理人に過ぎないみたいだけれど————お疲れ様。今までよくここまで、駆け抜けてきたね。」

「……………はい、頑張りました。」

そして、言葉を紡ぐ器官が失われていく。

それはアダムも同じだったらしく、もはやこの世界に言葉を発する事ができる者は存在しなくなった。時間経過と共に頭の中の記憶が一つずつ削除されていき、自分という存在が何者だったかすらも朧げになっていく。それはきっと、先に倒れた目の前の誰かも同じ事だったのだろう。私よりも先にそれは意識を失っていたらしく、もはやそれから活力を感じ取る事はできなかった——だというのに、それを見ていると何故か気持ちが穏やかになる。それがとても、満ち足りているかの様な表情をしているからかもしれない。

……さっきまで自分が、何を考えていたかすらも思い出せない。私も間もなく、目の前のそれと同じく思う事すらできなくなるのだろう。だが不思議と恐れは無い。目の前に倒れている人が笑顔で人生を終わらせる事が出来たのであれば、それに越した事はないと思ったからだ——そんな事を思いながら私は、頬を緩ませながらゆっくりと瞼を下ろした。